

『異邦人』(1942)によってパリの文壇への華々しいデビューを飾る前、カミュは小説を試みている。1971年に出版された習作『幸福な死』の存在はよく知られているが、それ以前に「ルイ・ランジャール」という小説を構想し、メモを残している。

「ルイ・ランジャール」は、ジャクリーヌ・レヴィ＝ヴァランシの命名による、小説のための一群の草稿断片を指し、1934年から1936年にかけてメモが取られたとされている。つまり、「ルイ・ランジャール」は、1936年から1938年にかけて構想が練られ書かれた『幸福な死』²⁾に先行するカミュの初めての小説の試みという点で、『異邦人』(1940年5月第一稿完成)を考察するうえで、検討を欠かすことのできないものである。「ルイ・ランジャール」は、注1)にあげたジャクリーヌ・レヴィ＝ヴァランシの学位論文で詳細に論じられ、同論文に「補遺」としてテキストが掲載されていた。その後、2006年3月に刊行された新プレイヤッド版で、ジャクリーヌ・レヴィ＝ヴァランシの学位論文の「補遺」に基づきつつもそこに修正を加えたかたちで、「ルイ・ランジャール」のほぼ全容が明らかにされた(*ŒC*, I, 86-93参照)。「ほぼ」としたのは、カミュがページ番号を打ったものの中で、見つかっているのは、「6ページ、12ページから43ページ、46ページから56ページ」(*ŒC*, I, 1225)であり、完全な全体像とは言えないからだ。以下、複数のパラグラフにまたがるものもあるが、語られている物語の内容について簡単に整理しておく³⁾。

- ・ 病室で⁴⁾向き合う母と息子(ルイ)。
- ・ 過去。母、祖母、兄、叔父との生活。支配者としての祖母。祖母の死。
[←「勇気」(おそらくは1933年)]
[→『裏と表』(1937)所収「皮肉」の第三話]
- ・ 17歳での咯血。病院での一夜。
- ・ 翌朝。病院の中庭に集う入院患者の描写。母に迎えられ、叔父(モデルはアコー叔父)の家へ。
[←「貧民街の病院」(1933年の日付)]
- ・ 叔父(モデルはエチエンヌ叔父)のさまざまな側面の紹介。
- ・ 母と(エチエンヌ)叔父との共同生活。母のプライバシーへの叔父の介入。母に逃げられた後の叔父のみじめな生活。汚れていく部屋。叔父の唯一の避難場所はカフェとなる。
- ・ 祖母の墓に行き、涙を流す(エチエンヌ)叔父。
- ・ 母の一人の生活の様子。

- ・ ルイの心を捉える、老いの観念と孤独。
- ・ カフェ。若者たちに話を聞いてもらえぬ、老いた叔父の孤独な姿を目撃するルイ。
 [←「貧民街の声」(1934年12月25日の日付)の「2」]
 [→『裏と表』所収「皮肉」の第二話]
- ・ 映画に行く若者から置き去りにされる老婆。
 [←「貧民街の声」の「4」]
 [→『裏と表』所収「皮肉」の第一話]
- ・ ルイの発病、(アコー)叔父の家での療養、叔父の家を出てからの一人住まいへの手短かな言及。
- ・ 想起される過去(少年時代)。無関心な母とその「動物的な沈黙」(*ŒC*, I, 77)。
 [←「貧民街の声」の「1」]
 [→『裏と表』所収「肯定と否定のあいだ」]
- ・ 知の世界を歩み始めたルイと母とを隔てる溝。だが、自己の真に希求するものは、母がその象徴であるような世界だと思うルイ。
- ・ 暴漢に襲われ失神した母と共に過ごす一夜。「母とを繋ぐ絆」(*ŒC*, I, 91)を認識するルイ。
 [→『裏と表』所収「肯定と否定のあいだ」]
- ・ 咯血時にも示された母の「無関心」の理由を理解するルイ。「暗黙の了解」と「いかなる沈黙によっても揺るがない、きわめて強固な愛着」(*ŒC*, I, 92)によって母と結ばれていると確信するルイ。

以上、全体的な流れを簡単に示したが、実体験や母・祖母・叔父といった身内の者たちの姿が赤裸々に語られてはいるものの、各挿話間の繋がりが密とは言えず、全体としてのストーリー性は稀薄だ。おそらくは、その「動物的な沈黙」に恐怖すら覚えた母への理解に至る息子の物語がテーマだろうが、カミュの生涯を知る者にとっては、三人称小説の試みという形式にもかかわらず、自伝的世界の作品化だということは容易にみてとれる。では、なぜ自伝的世界を小説化しようとしたのだろうか？

1932年、恩師ジャン・グルニエにすすめられ、カミュはアンドレ・ド・リショーの『苦悩』を読む。そして、よく知られているように、自己の生を直接的に語る事ができる、との思いを抱くようになる。少し長くなるが引用しておく。

[...] je rencontrai Jean Grenier. Lui aussi me tendit, entre autres choses, un livre. Ce fut un roman d'André de Richaud qui s'appelait *La Douleur*. Je ne connais pas André de Richaud. Mais je n'ai jamais oublié son beau livre, qui fut le premier à me parler de ce que je connaissais : une mère, la pauvreté, de beaux soirs dans le ciel. Il dénouait au fond de moi un nœud de liens obscurs, me délivrait d'entraves dont je

sentais la gêne sans pouvoir les nommer. Je le lus en une nuit, selon la règle, et au réveil, nanti d'une étrange et neuve liberté, j'avancai, hésitant, sur une terre inconnue. Je venais d'apprendre que les livres ne versaient pas seulement l'oubli et la distraction. Mes silences têtus, ces souffrances vagues et souveraines, le monde singulier qui m'entourait, la noblesse des miens, leur misère, mes secrets enfin, tout cela pouvait donc se dire! Il y avait une délivrance, un ordre de vérité, où la pauvreté, par exemple, prenait tout d'un coup son vrai visage, celui que je soupçonnais et révérais obscurément. La Douleur me fit entrevoir le monde de la création, où Gide devait me faire pénétrer. (ÆC, III, 881-882)

『苦悩』体験は、このように、カミュの創作への出発点を画する出来事となったのである⁵⁾。これ以降、カミュは実体験のメモを残すようになる。先にあげた「ルイ・ランジャール」の内容紹介にあるように、1933年には「勇気」で家族像を、「貧民街の病院」では入院体験を、そして翌1934年の「貧民街の声」では、母・叔父・祖母像を描くことになる。「←」からもわかるように、そうした草稿を繋ぎ合わせ、「ルイ・ランジャール」は書かれることとなる。

すでに触れたように、「ルイ・ランジャール」は1934年から1936年にかけてメモが取られたとされているが、しかしながら1937年に出版されるのは、「ルイ・ランジャール」を部分的に組み込んだ、エッセー『裏と表』である。なぜ「ルイ・ランジャール」は放棄されたのだろうか？ 言葉を換えれば、なぜ小説という形式は断念されたのだろうか？

一つには、先にあげた「ルイ・ランジャール」の要約からもわかるように、小説としての構成が未成熟だったことがあるだろう。しかしそれ以上に、作品は「告白」であるとす、当時のカミュの文学観があったのではなかろうか？ 直接的に自己を語るには、小説という虚構化よりもエッセーの方がふさわしいことは言うまでもない。以下にあげるのは、有名な『手帖』の冒頭部である。少し長くなるが、引用しておく。

Mai 35.

Ce que je veux dire :

Qu'on peut avoir — sans romantisme — la nostalgie d'une pauvreté perdue. Une certaine somme d'années vécues misérablement suffisent à construire une sensibilité. Dans ce cas particulier, le sentiment bizarre que le fils porte à sa mère constitue *toute sa sensibilité*. Les manifestations de cette sensibilité dans les domaines les plus divers s'expliquent suffisamment par le souvenir latent, matériel de son enfance (une glu qui s'accroche à l'âme).

De là, pour qui s'en aperçoit, une reconnaissance et donc une mauvaise conscience. De là encore et par comparaison, si l'on a changé de milieu, le sentiment

des richesses perdues. À des gens riches le ciel, donné par surcroît, paraît un don naturel. Pour les gens pauvres, son caractère de grâce infinie lui est restitué.

À mauvaise conscience, aveu nécessaire. L'œuvre est un aveu, il me faut témoigner. Je n'ai qu'une chose à dire, à bien voir. C'est dans cette vie de pauvreté, parmi ces gens humbles ou vaniteux, que j'ai le plus sûrement touché ce qui me paraît le sens vrai de la vie. Les œuvres d'art n'y suffiront jamais. L'art n'est pas tout pour moi. Que du moins ce soit un moyen.

Ce qui compte aussi, ce sont les mauvaises hontes, les petites lâchetés, la considération inconsciente qu'on accorde à l'autre monde (celui de l'argent). Je crois que le monde des pauvres est un des rares, sinon le seul qui soit replié sur lui-même, qui soit une île dans la société. À peu de frais, on peut y jouer les Robinson. Pour qui s'y plonge, il lui faut dire « là-bas » en parlant de l'appartement du médecin qui se trouve à deux pas.

Il faudrait que tout cela s'exprime par le truchement de la mère et du fils.

Ceci dans le général.

À préciser, tout se complique :

- 1) Un décor. Le quartier et ses habitants.
- 2) La mère et ses actes.
- 3) Le rapport du fils à la mère.

Quelle solution ? La mère ? Dernier chapitre : la valeur symbolique réalisée par nostalgie du fils ??? (ÆC, II, 795-796)

『手帖』のこの冒頭部は、従来は『裏と表』のための覚え書と考えられてきたが、その内容や 1935 年という日付から、ジャクリーヌ・レヴィ＝ヴァランシが指摘するように⁶⁾、「ルイ・ランジャール」のためのものと捉え直さねばなるまい。そうだとすると、「作品は告白である」との思いから、小説という虚構作品ではなく、エッセーというジャンルによって、直接的に自己を語ろうとするようになったのではなかろうか？ そして 2 年後、カミュは自伝的エッセー『裏と表』を世に問うこととなったのではなかろうか？

それはなによりも「告白」を重視した出版であり、おそらく出版前からカミュは『裏と表』の形式面の不備は十分自覚していた。その根拠を二つあげておく。一つは、ジャン・グルニエ宛に、「私のささやかなエッセー集をあなたに捧げることをお許しいただけませんかでしょうか。欠点があるのは承知しております — それでも出版しますのは、それが必要になったと考えたからです。」⁷⁾と書き送っていることだ。1937 年のものとされるこの手紙には正確な日付は打たれていないが、献辞の許可を求めている以上、『裏と表』出版前に書かれたものと考えられる。第二点として、形式面の不備を自覚した、いわば一種の弁明ともいえる「序文」の計画の記述が 1937 年の『手帖』に見受けられることがあげられる。

Mai.

Projet de préface pour « L'Envers et l'Endroit ».

Tels qu'ils sont présentés, ces essais, pour beaucoup sont informes. Ce qui ne vient pas d'un mépris commode à l'égard de la forme — mais seulement d'une insuffisante maturité. [...]

(*ŒC*, II, 815)

そして、『裏と表』刊行後には、「舞台裏にとどまる」ことの必要性の実感、ならびに形式面も考慮に入れ「芸術作品」を創造するという将来の夢を親友に打ち明けることになる。1937年7月8日付のメゾンスール宛の手紙を見てみよう。

Je suis de votre avis, Jean : il fallait rester dans la coulisse. [...] Plus tard j'écrirai un livre qui sera une œuvre d'art. Je veux dire bien sûr une création, mais ce seront les mêmes choses que je dirai et tout mon progrès, je le crains, sera dans la forme — que je voudrai plus extérieure.

(*ŒC*, I, 97)

このような教訓を得たカミュは、以後、エッセーで自己を赤裸々に語ることはなくなるが、この手紙にもあるように、自伝的世界の芸術作品化の夢は終生持ち続けることになる。『手帖』に散見される、後に『最初の人間』に導入されることとなるエピソードのメモや『裏と表』再刊への序文のための草稿が、そのことを証している。自伝的世界の虚構化は、カミュのライフワークとなり、『最初の人間』となって結実するのである⁸⁾。

このように、カミュは小説「ルイ・ランジャール」を断念し、エッセー『裏と表』を処女作品として刊行し教訓を得たわけだが、『異邦人』との関連で述べれば、内容はもとより形式を重視する必要性や「舞台裏にとどまる」ことの重要性を学んだことは、『異邦人』に活かされることとなる。さらに、「ルイ・ランジャール」のメインテーマと想定される、母への真の理解に至る息子の物語は、虚構化され、『異邦人』に導入されることとなる⁹⁾。初めての小説の試みである「ルイ・ランジャール」は『異邦人』への第一歩ともなるのである。

注

アルベール・カミュの作品を以下のように略記し、本文中に直接ページを示す。

ŒC, I Albert Camus, *Œuvres complètes*, tome I, 1931-1944,
« Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2006.

ŒC, II Albert Camus, *Œuvres complètes*, tome II, 1944-1948,

« Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2006.
ŒC, III Albert Camus, *Œuvres complètes*, tome III, 1949-1956,
« Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2008.

なお、引用文中の下線はすべて松本による。また、邦訳のあるものについては、それを参照させていただいたことをお断りしておく。

- 1) Jacqueline Lévi-Valensi, *Genèse de l'œuvre romanesque d'Albert Camus*, thèse pour le doctorat d'état, Sorbonne, 1980, p.326. 同論文は、加筆・修正のうえ、2006年4月にガリマール社から刊行された。Jacqueline Lévi-Valensi, *Albert Camus ou la naissance d'un romancier*, Gallimard, 2006. 同書、p.207も参照。なお、以下、ページは2006年にガリマール社より出版された著書のページのみ示す。
- 2) ジャン・サロッキの指摘。Jean Sarocchi, « Genèse de *La Mort heureuse* » dans Albert Camus, *La Mort heureuse*, « Cahiers Albert Camus 1 », Gallimard, 1971, p.8 参照。
- 3) 「→」は『裏と表』に活かされることを、「←」は先行する草稿から「ルイ・ランジャー」にほぼそのままのかたちで導入されたことを示す。ジャクリヌ・レヴィ＝ヴァランシとサマンタ・ノヴェロによるプレイヤッド版の注 (*ŒC*, I, 1226-1227) も参照されたい。
- 4) ジャクリヌ・レヴィ＝ヴァランシは次のように指摘する。「[...] la blancheur de la chambre, en effet, indique qu'il s'agit de celle de l'hôpital où Louis a passé une nuit et où sa mère vient le chercher à la fin de la matinée. » (Jacqueline Lévi-Valensi, *Albert Camus ou la naissance d'un romancier*, p.216.)
- 5) 1958年、ヴィジアニの質問に答えて、『苦悩』体験をカミュは次のように述べてもいる。「J'ai découvert qu'un enfant pauvre pouvait s'exprimer et se délivrer par l'art.» (Carl A. Viggiani, « Notes pour le futur biographe d'Albert Camus » dans *Albert Camus I*, Lettres Modernes, 1968, p.210.)
- 6) Jacqueline Lévi-Valensi, *Albert Camus ou la naissance d'un romancier*, p.215 参照。
- 7) Albert Camus—Jean Grenier, *Correspondance*, Gallimard, 1981, p.28.
- 8) 詳細については、拙稿「*Le Premier Homme* の形成過程」、『広島大学 フランス文学研究 16』、広島大学フランス文学研究会、1997、pp.15-32 あるいは 拙著『アルベール・カミュの遺稿 *Le Premier Homme* 研究』、駿河台出版社、1999、pp.27-54 を参照されたい。
- 9) パンゴーは次のように指摘している。「Mais nous n'aurons pas épuisé les sens possibles de *L'Étranger* si nous ne lisons pas aussi ce livre comme l'histoire d'un fils. » (Bernard Pingaud, *L'Étranger de Camus*, « Poche critique », Hachette, 1973, p.71.)